

連携を深めがん患者の  
意向を踏まえた医療を

わが国の3大死因はがん、心疾患、脳血管障害で全体の2/3を占めます。そのうちの死因のトップはがんで、毎年30万人以上が亡くなっています。しかも生涯罹患率は男性で2人に1人、女性では3人に1人、年間の新たながん患者は50万人以上であり、もはや「国民病」と言われても過言ではないと思われます。がんは体細胞の遺伝子異常から発生する疾患で、高齢化が重要な因子と言われています。長寿国の日本にとっては今後の重要な課題です。

がん医療の均てん化を戦略目標として、全国どこでも質の高いがん医療を提供できるように厚生労働省はがん診療連携拠点病院を指定しました。市立札幌病院は平成17年1月に地域がん診療連携拠点病院となりました。平成21年のがん患者入院数は1660名と漸増し、がん手術件数が857件、546名が放射線治療を受け、化学療法は入院1500件、外来2439件でした。

がん医療には手術、放射線治療、化学療法、緩和ケア、患者からの相談に応じた業務、がん登録業務など多岐に渡って重要な仕事があります。これらは医師、コメディカルスタッフ、事務職員が協力して行う、まさに連携チーム医療です。今後がん患者の状態に応じたレベルの

高い適切な医療を提供できるように努力していきたいと思えます。

がん治療は拠点病院で完結するとは限らず、がん患者の意向を踏まえ、住み慣れた家庭や地域での療養を選択できる生活の質（QOL）の高い医療が求められています。そのための地域の医療機関も専門的ながん医療の知識が求められており、研修会などを通して情報提供を積極的に行い、一層連携を強化して行きたいと思っています。今後ともよろしく願いいたします。

理事  
晴山 仁志

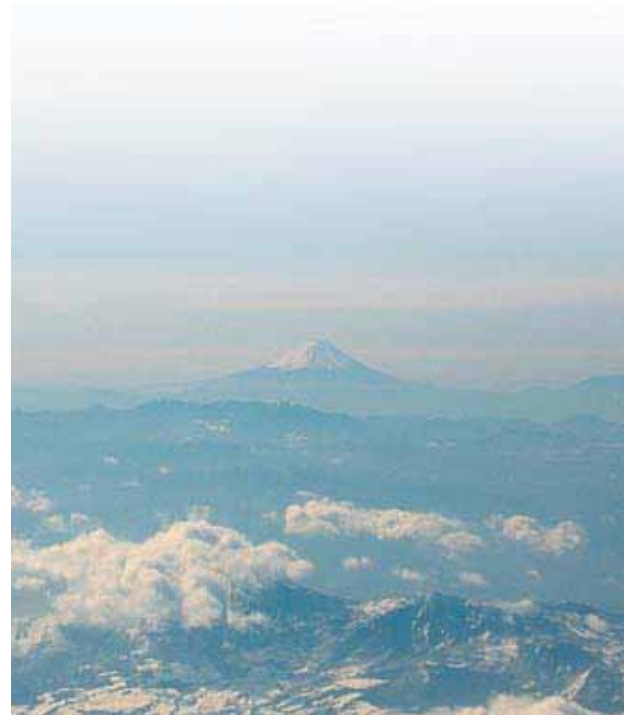


photo by 大野 将人